

国語科教材研究における「視点」概念の問題

——「ごん狐」をめぐる——

松 本 修

一 問題の所在

国語科教材研究における視点概念は、西郷竹彦の視点論、井関義久による分析批評の視点論、いわゆる法則化運動における分析批評の視点論によって一般化した。それぞれの論相互の間の視点概念の相違(1)という問題や、それぞれの視点論自体の内部における理論的不整合の問題があり、議論の混乱がある。ここでは、新美南吉の「ごん狐」をめぐる議論の混乱の現状とその原因を検討し、「視点」概念のもつ問題点を指摘するとともに、その解決の方向性を探ってみたい。(2)

二 「ごん狐」をめぐる「視点」にかかわる議論

視点概念にかかわって、集中的な議論が見られるのが「ごん狐」の定稿「六」の場面における「兵十はかけよつて来ました」という表現についての検討であり、いわゆる「視角」転換説の是非である。この議論を一瞥したい。

「六」の本文は以下の通りである。

そのあくる日ひもごんは、栗くりをもつて、兵十ひやうの家へ出でかけました。兵十ひやうは物置ものおきで縄なはをなつてゐました。それでごんは家の

裏口うらくちから、こつそり中なかへはいりました。そのとき兵十ひやうは、ふと顔をあげました。と狐きつねが家の中なかへはいったではありませんか。こなひだらなぎをぬすみやがつたあのごん狐ごん狐めが、またいたづらをしに來たな。「ようし。」

兵十ひやうは、立ちあがつて、納屋なやにかけてある火縄銃ひなはじゆうをとつて、火薬くわやくをつめました。そして、足音あしおとをしのばせてちかよつて、今戸口いまとぐちを出でようとすごんを、ドンと、うちました。ごんは、ばかりとたはれました。兵十ひやうはかけよつて來ました。家の中なかを見ると土間どまに栗くりが、かためておいてあるのが目めにつきました。「おや。」と兵十ひやうは、びつくりしてごんに目を落おとしました。「ごん、お前まへだつたのか。いつも栗くりをくれたのは。」

ごんは、ぐつたりと目めをつぶつたまゝ、うなづきました。兵十ひやうは、火縄銃ひなはじゆうをばたりと、とり落おしました。青い煙けむりが、まだ筒口つつぐちから細ほそく出でてゐました。(3)

この部分について、西郷竹彦から出された次のようないわゆる「視角転換説」がある。

これまでずっと一章の(4)から、六章の(27)まで、作者は、話者の《外の目》をごんという人物の《内の目》にかさね、(む

しろ、ごんを視点人物として）兵十を対象人物としてえがいてきました。

しかし、この(28)にきて、〈そのとき兵十は、ふと顔をあげ……〉から、視角を兵十に〈きりかえ〉たのです。これを視角の転換といえます。

(28)が、ごんの視角でないことは、〈ごん〉という名のところに「わたし」ということばを代入してみれば不自然になるので、すぐわかります。

「そのとき兵十は、ふと顔を上げました。と、わたしは、家の中へはいったではありませんか。こないだ、うなぎをぬすみやがったあのわたしめが、またいたずらをしにきたな」

このまえの(27)は、ごんがいわば視点人物ですから、ここは〈ごん〉に「わたし」を代入してもすなおに読めます。

「そのあくる日も、わたしは、くりをもって兵十の家へ出かけました。兵十は、物置でなわをなっていました。それで、わたしは、家のうら口から、こっそり中へはいりました」

(28)の文章の〈兵十〉に「わたし」を代入してみてください。あなたは、こんどはごんではなくて兵十と同化し、兵十の身になり、兵十の心になって、ごんの「すがた」「ようす」を見ることになります。

「そのときわたしは、ふと顔をあげました。と、きつねが、家の中へはいったではありませんか。こないだ、うなぎをぬすみやがったあのごんぎつねめが、またいたずらをしにきたな。

『ようし』

わたしは立ちあがって……」(4)

ところがこの見方に立つと、「兵十はかけよつて來ました」の一文についてのみ再び視点は「ごん」の側に転換する、ということになる。西郷はこの問題について、スパルタノート(草稿)に「來ました」とあることを確認しつつも、「かけよつて、いきました」か「兵十はかけよりました」とすべきだという校訂を提案した(5)。しかし、この提案は、西郷自身の視点論以外に大きな根拠はなく、西郷自身の「理論(文芸学)のために作品(文芸)があるのではありません。文芸のために文芸学は奉仕するのです。(6)」という主張に矛盾しかねない。この校訂提案は受け入れられず、むしろこの視角転換説への批判として諸説が提出されることになる。

望月善次は、安藤操、藤原和好の西郷説への異論と萬屋秀雄によるその整理、および鶴田清司による西郷説を踏まえた視点分析を整理検討した(7)。視点論の範囲における具体的な検討としては望月の検討に付け加えることはないので、その要点を整理する。

① 西郷理論の「安直さ」を指摘する安藤の読み(読み手が兵十とごんの両方をイメージしているから、読み手はごんの身になって兵十が近づいてくることに対して危機感をそそられる、という読み)は視点論以外の理論からなされた批判である。

② 「視点論」を踏まえた上で西郷の読みに異論を立てる藤原の読み(ごんの視点から、ごんの視点と兵十の視点の両者の視点をとともに持ちながらその両者を超えた地点に読者が立ち、ごんへの愛着の気持ちを維持しつつ、兵十の憎しみをも知っていく、とする読み)も、視点論以外の理論からの批判である。

③ 西郷視点論の有効性を認めた上で、藤原論を支持し、『読者側の読み』を重視したい、という萬屋の総括は、西郷視点論の一般的有効性を支持するものか、この場面での有効性をのみ認めるものか不明であり、視点論の範囲についての検討を欠いている。

④ 分析批評の視点論にたつ鶴田は、分析批評の用語に従いつつ西郷視点論を検討し、結果的に内容的にほぼ重なる読みを提出した。

⑤ 西郷―鶴田の読みは、「ごん狐」という作品の視点が「三人称限定視点」である点、ごんから兵十への視角（視点）の転換が行われている点、の二点に集約される。

この検討の上に望月は、西郷―鶴田の読みを批判して、「ごん狐」の視点は「三人称全知視点」であり、「話者が複数の「登場人物」の心の中を入れ換わりながら往来する」という自説を提出し、その入れ換わりを次のように示した。

A 〈ごん〉 そのあくる日もごんは、栗をもつて、兵十の家へ出かけました。

B 〈兵十〉 そのとき兵十はふと顔をあげました。

C 〈ごん〉 ごんは、ぼたりとたほれました。(兵十はかけよつて来ました。)

D 〈兵十〉 家の中を見ると土間に栗が、かためておいてあるのが目につきました。

E 〈ごん〉 ごんは、ぐつたりと目をつぶつたまゝ、うなづきました。

F 〈兵十〉 兵十は、火縄銃をぼたりと、とり落としました。

主語ないし想定される主語に対応して話者が登場人物のそれぞれに近づく、という内容の分析になっている。望月はCにおける視点の転換を、異論の可能性を考慮した上で、「Cで、換わったと考える方が、「全知視点」の特徴がよく出ること、「草稿D」の「所が」の叙述が生きていること、そして何よりも、「兵十はかけよつて来ました。」が無理なく説明できる」として容認している。西郷・鶴田と望月との決定的な違いは、だから、「限定」か「全知」かというところにあり、視点の転換については、望月がより頻繁に転換を見るところになるものの、「かけよつて来ました」については、この形の本文をとる限り同じである。

藤井園彦は望月より早く「全知視点」の立場からこの箇所を論じているが、その内容には違いがある。

さて、「第六章」において、どのような「視点」について指導をしたか。ここは、

○話者の視点

○話者がごんに寄り添い、ごんの心の中にまで入る視点

○話者が兵十に寄り添い、兵十の心の中にまで入る視点

で書かれている。つまり三人称全知視点である。

この場合、話者の位置（意識も含む）が、ごんの側にあるか、兵十の側にあるかが大切な問題になってくる。(8)

藤井の読みは、望月の分け方に従えば、A∥ごん、B∥兵十、C∥ごん、D∥兵十と据えており、望月と同じである。E、Fについては相違がある。

こうしてみると、望月の指摘にあるように「視点論と視点論以外の論点をどう区別するかにかかわる混乱」がまず認められ、また、視点論の枠内にとどまっても「いわゆる全知、限定という用語に関連する視点の把握の仕方にかかわる混乱」が認められるのである。この二点について、その原因と解決策を考える必要がある。

三 視点の把握をめぐって

まず、「視点の把握の仕方にかかわる混乱」について、実際にどの部分がどの視点であると読んでいくかという観点から諸説を整理・検討する⁽⁹⁾。なお、場面の分け方は望月に従うが、Cについては、「ごんは、ばたりとたほれました」をC1とし、「兵十はかけよつて来ました」をC2とする。また、最後の一文「青い煙が……出てきました。」をさらに分割してF2とし、その前をF1とする。

論者	西郷	鶴田	望月	藤井
視点	限定	限定	全知	全知
場面A	ごん(内の目)	ごん	ごん	ごん(寄り添い)
B	兵十(内の目)	兵十	兵十	兵十(寄り添い)
C1	兵十(内の目)	兵十	ごん	ごん(寄り添い)
C2	ごん(内の目)	ごん	ごん	ごん(心の中)
D	兵十(内の目)	兵十	兵十	兵十(心の中)
E	兵十(外の目)	兵十	ごん	客観
F1	兵十(外の目)	兵十	兵十	客観
F2	客観(外の目)	兵十	兵十	客観

望月の整理と提案は、視点論の枠内でみた場合の西郷―鶴田説の

誤りをただす、というものであり、西郷の誤りについては鈴木三重吉の補筆による全知視点色の希薄化に遠因をもつたなる「初歩的」な誤りであるとしていた。鶴田も諸説を整理しているが、「不自然さは残るが、「視点論」(作品ないし話者の視点)のレベルで考えると仕方ないだろう。」⁽¹⁰⁾として、視点論に伴う論の錯綜の原因には検討が及んでいない。しかし、「ごん狐」の話者は全知だと確定すれば議論が収束するかというと、そうではない。その混乱の原因は何であろうか。

望月と藤井の間にはいわゆる三人称視点における語り手の視点が登場人物の心の中に入り込むのか、それとも単に寄り添うのか、という点に考え方の相違が認められる。望月は、「話者が複数の「登場人物」の心の中を入れ換わりながら往来するのは、きわめて自然のことになる」として、視点が心の中に入り込む、という考え方をしている。「ごん狐」の「四」の部分における「加助は、ごんには気がつかないで、そのままさつさとあるきました。」「加助は、何も知らないで、又前を向いて行きました。」という叙述を、「話者は、「加助」の心の中にも入っている」と指摘しているのはこのためである。一方藤井は、語り手の視点は、「寄り添う」ものだとしており、「話者は、ごんの後に寄り添って、向こうの兵十を見ている」「兵十の側に立って、兵十の肩越しに、しのびこんだごんを見た」と表現している。「兵十はかけ寄つて来ました」の一文については、「ごんのすぐそばに寄り添う話者の眼」「ごんの心の中に入ってしまったという全知視点」としており、二者の違いは明示的でないものの、「すぐそば」という表現に見る通り、語り手と登場人物の距離の取り方には

微妙な差異があることを示している。望月は議論を視点論の用語の枠に収めようとしてこの微妙な差異を捨象してしまったのではない。この点についての考え方が異なると、視点論に議論を限定しても、議論は食い違ふのである。話者（語り手）と登場人物の距離を讀み手がどう把握するか、という問題については、視点概念の規定においてその距離がどのような範囲をとりうるというふうにあらかじめ規定しておくかという、概念規定上の問題があり、また、具体的にひとつひとつの表現においてその距離をどの程度のものとして讀み取るかという、讀みの個別性にかかわる問題がある。前者の問題については、微妙な差異を捨象してしまうような窮屈な規定では、讀みを狭くすることになるし、後者の問題については、話法の問題ともかかわるが、讀みの個別性はどこまでいっても排除できないということをとりあえず指摘しておきたい。

四 視点論の枠をめぐって

望月が視点論以外からの議論としていた議論にみられるのは、安藤・藤原の両論に見る通り、読者という概念である。読者が誰に寄り添って物語の場面をのぞきこむか、あるいは誰の心情に近づくかということが、どう視点の問題とかわるか、という問題である。これは、確かに狭い意味での視点論の外部からの議論になるが、実は必然的に視点論にもかかわってくる。議論の発端である西郷の論においても、読者概念の内在が認められた。西郷は次のように言っている。

読者は、兵十の気持、身になっても見ることができるとい

ことなのです。ごんの立場だけで見ないということなのです。

作者は、兵十の身にもなってもらいたいと思ったわけでしょう。

ごんの視角のままでは、ただそれだけになってしまったために、兵十のしわざをうらみ、兵十を「悪者」にしてしまおうでしょう。(11)

西郷の読者概念は、視点人物―焦点人物、内の目―外の目、同化―異化という一連の対概念の関係の中で機能し、さまざまな学習場面を構成する鍵になるものであって、授業実践の中で生きる概念である。このことが西郷の視点論の内容を決定していると考えられる。安藤・藤原の批判に見られるのは、より素朴な読者概念であり、西郷の抽象的・理論的な読者概念とのレベルの違いはある。しかし、いずれにせよ、それぞれの論においていわば読者の視点というものが問題になっており、しかもそれぞれの論者のイメージにある典型的読者、結果的に論者自身に近い読者が想定されてしまっていることが指摘できよう。つまり、読者概念に重ねられているのは論者自身の読みなのであり、自己の解釈を補強するために読者概念が援用されているのである。ここには、いわゆる視点論の問題に、読者あるいは読者の視点が概念規定の甘さを内在させたまま重ね合わせられているという問題がある。この問題には、学習過程を構想し、そこから読者―学習者―授業者という想定のもとに前倒しの教材研究が行われるという教材研究の実態が反映されている。西郷の場合には、理論的な手順が介在するが、基本的には同じである。西郷視点論において、「外の目」と「内の目」がいったん区別されながら結局は「外の目」が「内の目」に吸収されてしまうのは、客観的な読

みを学習者の感動として統合しようとする「授業の論理」があらかじめ措定されているためであろう。

五 語りの構造

以上指摘したような問題点を解決するためには、視点論の精緻化と視点論の枠組みの拡大（読者概念の取り込み）が必要であろう。

これはある意味で従来の視点論を超えるものであり、視点論と呼ぶよりも、「語りの構造」論というように呼ぶべきものである。

すでに山本茂喜は、「ごんぎつね」の視点と語りについて、シュタインツェル、チャットマンらの物語論を援用して独自の分析を行っており、ここで見た語り手と視点との関係について、次のように述べている。

西郷竹彦の提言は、そもそもテキストのある場面全体を一つの視点で統一することに無理があった。視点が段落ごと、また文ごとにも移り変わる生きたテキストを、強引に一つの視点で統一させようとする所に無理があったのである。そして、その

ような論の根本には、視点と語りとの混同、同一視がある。⁽¹²⁾

山本は、同様の欠陥を望月、藤井の論にも指摘した上で、物語論の援用による視点の把握の精緻化によって「ごんぎつね」の重層的な視点と語りの構造をときあかし、議論の混乱を解決している（西郷の論でも子細に見れば、先の一覧表に示したように「六」の最終部分を客観的視点として読んでいることがわかる。この点は、「統一」されていないので、配慮すべきだろう。因みに、これは西郷の強引な校訂提案に一見矛盾するが、作品の終結という作品構造をこ

の場面では重視したための解釈だと思われる）。山本の論によって、視点論以外の論と視点論との区別の仕方にかかわる混乱は解決されたといってもよい。ただし、なぜ従来の論がそうした欠陥をもたざるを得なかったかについては、補足する必要がある。すでに見たように、西郷視点論には、授業の運びという別の論理が前提的に措定されている（「内の目」と「外の目」という対立を作りだし、それを学習者の感動において統合させようとするような）という問題があったのであり、望月の場合には問題を従来の視点論の範囲に限定しようとしすぎたのである。藤井の場合には、視点と語りとの関係に気付きながら、その整理が不十分だったのである。そしてそこには、読者の問題が介在している。

山本が指摘したような語りの構造を、解釈の前提として読者が共有することが求められているのであるが、それでも、読みは分かれていくであろう。語り論における「話法」研究の中心領域はヴォイス（態）研究であり、テキストの言説には語り手の声、登場人物の声が二重に響くという基本的性質があることが指摘されている。山本も指摘するとおり、「ごん狐」にも自由間接話法（描出）が用いられており、こうした箇所において、このテキストの超越的な語り手の声をより強く聞き取るか、それとも登場人物の声をより強く聞き取るかは、読者によって分かれるのである。「兵十はかけよって来ました」の一文についての藤井の解釈について、山本は語り手の語りを登場人物に重ねた誤りとする見解を出しているが、重ねて読むことも不可能とは言えないであろう。山本も支持している長尾高明の解釈にはそのことが端的に示されている。

(3)は、死んでいくごんを描くのだし、それを見る兵十の悲しみを描くのだから、兵十の視点で書かざるを得ない。ただし、「ごんは、ぼたりとたおれました」という描写で、読み手ははっとして、ごんのほうに意識が行くであろう。作者も、ごんの姿を描いた勢いで視点が兵十から離れてしまった(物語的視点が入り込んだ)のである。(中略)読み手にとってそれは不自然には感じられないはずである。⁽¹³⁾

読者が基本的には語り手に寄り添って物語を読むことになるのは確かであり、だからこそ「語りの構造」を解釈の前提として共有すべきだということにもなるが、その前提の上でどのように「声」を聞き取るかには選択の幅があるのである。この点については、「話法」研究の範囲内でもすでに指摘がある⁽¹⁴⁾。このような意味で、視点論と読者概念の双方を理論的に包含しつつ、読みの幅を許容しうる形で、全体を整合的に論じることのできるような実際の語り構造把握の枠組みが示されなければならないであろう。

六 今後の課題

従来、語りの構造を問題にする議論においては、欧米の物語論のなかの特定の概念を持ち込み、それを道具として、特定のテキストの読みを提示することが行われてきた。しかしこれでは、ナラトロジーは解釈をメタレベルから検討しつつも、つまりは従来の解釈を否定して自らの解釈の正当性を主張するための手立てとなってしまう。語りの構造の分析は、新たな解釈の枠組みではない。むしろ解釈の自由を許容する読者論的な読みに一定の基盤を提供するものと

しての側面をも持つものである。それは教室において互いの読みの違いを検討する上での有効な媒介ともなるであろう。こうした立場から、国語科教材研究に実際に役立つような語りの構造分析の簡略な手順を提示する必要があるものであり、その要請に応えることが、今後の課題である。

〈注〉

(1) 国語科教育にかかわる諸視点論間の相違については、すでに杉田、長尾による整理がある。

杉田知之『分析批評の方法論—文学教材の読みを問う—』明治図書 一九八八

長尾高明『鑑賞指導のための教材研究法』明治図書 一九九〇
(2) ここでは、授業実践における視点概念の用い方まではふみこまず、教材分析の観点としての視点概念の検討にとどめる。

(3) 大石泰三他編『校定新美南吉全集第三卷』大日本図書 一九八〇
一五頁

(4) 西郷竹彦『西郷竹彦文芸教育著作集』2 明治図書 一九七五
一一五—一一六頁

(5) 西郷竹彦 前掲書 一一六—一一八頁

(6) 西郷竹彦 前掲書 一二頁

(7) 望月善次「ごん狐」の「視点」—「視角」転換説—を否定する—『読書科学』一四七号 日本読書学会 一九九四、四 一九—二五頁 以下望月論の引用はこの論文からのものである。
検討対象となっているのは以下の論である。

- 安藤操 『文学教育―その実り豊かな実践のために』 新評論 一
九七八
- 藤原和好 『文学の授業と人格形成』 部落問題研究所 一九八一
西郷竹彦 『教師のための文芸学入門』 明治図書 一九六八
鶴田清司 『「ごんぎつね」の〈解釈〉と〈分析〉』 明治図書 一
九九三
- (8) 藤井罔彦 「何のために「視点」を分析するのか」 『現代教育科
学』 三七八 明治図書 一九八八、5 三四―三七頁
- (9) ほかに、佐々木俊幸の二重視説が知られているが、この議
論は全知視点の立場に立つものか限定視点の立場に立つものか不
明な、折衷的なものなので、ここでは検討の対象とはしなかった。
- (10) 鶴田清司 前掲書 五一―五二頁
- (11) 西郷竹彦 前掲書 一二二頁
- (12) 山本茂喜 「「ごんぎつね」の視点と語り」 『人文科教育研究』 第
二二号 人文科教育学会 一九五五、八 二三―三二頁
- (13) 長尾高明 前掲書 一九―三〇頁
- (14) 野村真木夫 「描出―テクストの研究にかかわる一つの問題提起
―」 『国語研究』 第十号 上越教育大学国語教育学会 一九九六
三一―四二頁

(上越教育大学)

一九九七・一・一六 発送